

すっかんぽ

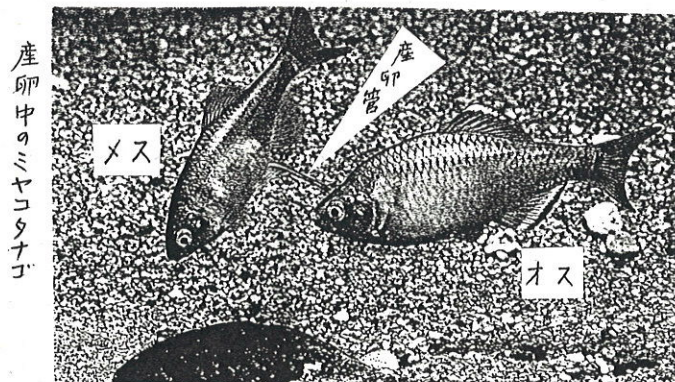
☆ 研究室だより No.12

1993年 5月号

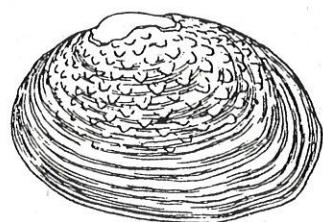
渡良瀬遊水池の

カラスガイ

青木清治 (31才)。彼は、宇大教育学部 大学院で淡水魚 (特にタナゴ) を専門に研究している。タナゴの仲間は、全国に 20 種類 近くいるのであるが、彼が実験に使っているのは、タイリクバラタナゴ (略して タイバラ) と言って、現在、最も普通にみられる種類である。タイバラは、中国からの輸入魚に混じて日本に移入された 帰化生物 で、強い繁殖力により、今や全国に勢力を広げている。国の天然記念物に指定されているミヤコタナゴは、マツカサガイという二枚貝にしか卵を産みつけないのに対し、タイバラは特に決まった貝でなくてもよく、子孫を残すのに有利なのである。



↑ マツカサガイ (「レッドデータアニマルズ」より改変)



マツカサガイ (実物の $\frac{2}{3}$)

(川村「日本淡水生物学」より)

青木さんによると、タナゴの入った水槽に、大型の二枚貝を入れておくと、雌から産卵管がのびてきて、貝のえらに産卵し、貝に子供を育てさせるのだそうだ。そこで、淡水産二枚貝としては最も大型 (殻の長さが最大 30cm に達する) の カラスガイ と 渡良瀬遊水池に採りに行くこととなったのである。今回は、青木さんたちの採果に同行させていただいた。

4月18日、晴天。4月に入ってから雨なし続きで、水路の水位は、ひざ位に減っており、今日はまさに貝掘り日和である。しかし、カラスガイは、泥の中にすんでいるので、普通の長靴では、全く役に立たず、胴長という腰まである長靴が威力を発揮する。胴長をはいて、四つんばいで全身泥だらけ、というのは、悲しいものがあるが、一度やてしまうと、け、こうおもしろくて、ついつい「やめられまへんなあ」の世界にはまってしまうのである。30cm の大物をねらっていたが、20cm 以下の小物ばかり約 20 個が、本日の成果であった。

(後半へつづく)



1993. 4. 18
Aoyagi

※ これが、正しい貝掘りスタイル。泥だらけになるのを恐れてはいけない。同行した 上田先生 (助教授) は、一部始終をビデオに撮っていた。我々は、てきり学術的な記録かと思い、熱心だなあと感じていたが、実は、誰かが必ずこけると、その瞬間のために、ひたすら、カメラを回っていたのだ。た、後で「君さ、もう少しでこけそうだったのに」と言われた時、こけなれよかったと、誰もが思ったことだろう。

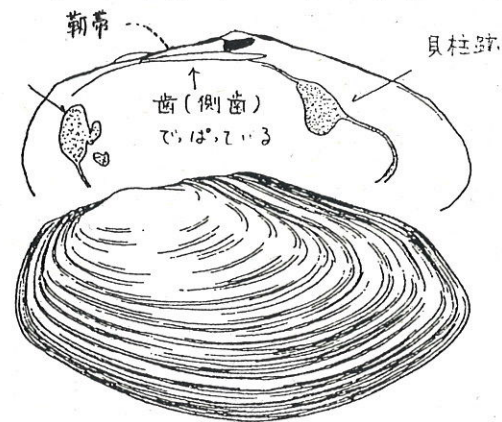
大学に帰って、青木さんと、貝類の図鑑も何気なく見ていたら、一つの重大な疑問がわいてきた。それは、

“この貝は、カラスガイではなく、ドブガイかもしれない”

というものだった。その根拠は、①ドブガイも最大20cmくらいになり、外見がよく似ていること、②ドブガイは全国各地に分布しているが、カラスガイは限られた地域でしか確認されていない、③大型の黒い貝を全てカラスガイと呼んでいる地方が多い…など

そこで、県立博物館に持ち込み、専門家に鑑定してもらうことにした。

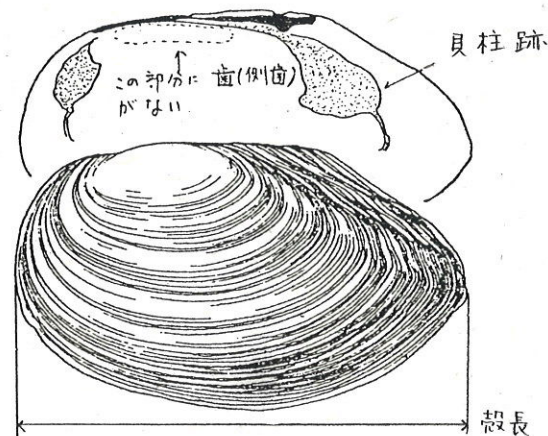
無セキツイ動物全般を担当していらっしゃる^{ふじの}古野主任研究員は、さっそく、本物のカラスガイとドブガイの標本を持ってきて、両者の見分け方を以下のように説明して下さいました。



＜カラスガイ＞

- ・ 殻長が 30cm 近かったら、まちがいない
- ・ 20cm 以下の場合
↓
殻の内側の ちょうつがい部(靱帯^{じんたい}部)の下に 歯(側歯) と呼ばれる突起がある。
(歯は殻のガミ合わせに関係)

- ・ 渡良瀬 遊水池 でも見つかっている。



＜ドブガイ＞

- ・ 殻長は、せいぜい 20cm 止まり
- ・ 殻の内側に 歯 が無い
- ・ 渡良瀬 遊水池 でも見つかっている

(図は、川村「日本淡水生物学」より改変)

遊水池にカラスガイとドブガイの両方がいる以上、最終的な判断は、解剖して、歯があるかどうかを調べるしかないさそうである。青木さんは、

糸のこの刃と、殻のすき間から差し込み、貝柱を切断した。

あ、けなく、殻はあいたが、歯と呼ばれる突起はみあたらない。

やはり、カラスガイではなく、ドブガイだったのである。つまり、今までカラスガイであると思い込んできたものに、ドブガイが少くとも含まれていたのだ。タイリクバラタナゴにとっては、大きな違いではないかもしれないが、私たちが身の回りの自然を見る時、こうした思い込みは、実は、たくさんあるのではないだろうか。

ところで、ドブガイやカラスガイを水槽で飼っていると、ビックリするような光景に出会えるという。青木さんによると、これらの貝は、エラの中で自分の子を育て、稚貝になると、いせいに水中に吹き出すというのだ。それまで透明だった水が一瞬にして白く濁るのだそうだ。今年はぜひ、その光景を見たいものだと思っている。

